暴力論　第三回

大震災に関して私が思うこと

光枝　初郎

ジュディ・バドニッツの短編集『元気で大きいアメリカの赤ちゃん』の話の中で、ある一国の市民に世界の終わりの時が来たと報じられるシーンがある。

見たこともないくらい美しい、よく晴れた日だった。空は雲ひとつなく、抜けるような青で、かすかに吹くやわらかなそよ風に、誰もが見えない手にふんわり持ちあげられているような気分になった。くたびれきったゴミ収集人たちやテレビの天気予報士でさえ、空気のかぐわしさに足を止めて、うっとりと空を仰いだ。[1]

世界が終わるという一日はよく晴れた日だった……。このような描写はよく見られるものでもあるが、東日本大震災が起こった日に私が体験したのはこれとよく似た光景に他ならない。というのは、大震災が起こった直前直後を全く知らなかったからである。

その日、私は大学のゼミ生と一緒に福岡の山奥の合宿場所からの帰り途中であった。実に天気のいい日だった。一行の帰りを引率する途中で、先生は合宿場所の近くにおいしいうどん屋があると言って、僕たちの昼ご飯をおごってくれた。福岡ではごぼう天うどんというのが名物で、ごぼうを一本まるまるあげた天ぷらが幾つも上に乗ったうどんを私は仲間と一緒に美味しくすすっていた。

電車、地下鉄と乗り換えて、前日みなと一緒に徹夜していたものだから眠気がひどく、家についたらずっと寝ていた。だから、私が震災を知ったのはその日の夜のことである。テレビをつけたら、どのチャンネルもあの有事をヒステリックに伝えていた、というあの事態だ。

もちろんその報道で衝撃を受け、岡山にある実家にも電話をしたし（何の影響もなかったが）、それなりにショックだった。連日テレビを見ていた。それでも、私にとっては、岩手や福島、東京であれだけ悲惨なことが起こっていたあの時、かたや福岡でまぶしい陽光を浴びつつのんびりゼミ仲間と一緒にうどんをすすった光景があったという方がよりショッキングであった。

大震災に関して私が思うことは、だから、震災関連の書籍で溢れかえっている言説空間

[1] ジュディ・バドニッツ「備え」『元気で大きいアメリカの赤ちゃん』（岸本佐知子訳、文藝春秋、2015）、pp.373。

とはちょっと異質なものである。それは、平たくいえばナショナリズムの問題である。
つまり、あの出来事が起こっていた時、東日本（東京、福島）と西日本（福岡、岡山）では全く違った光景が同時に繰り広げられていた。津波が日本を襲った時私はのんびりうどんを馳走になっていたのである。しかし、全ての報道機関は全国民に対してそのショッキングさと衝撃を伝えていた。
こういう言い方をして誤解を招くかもしれないことを予め伝えておく。あの時私は、福島や東京で苦難を受けている人を「同じ人々」だとは捉えられなかったのだ。なぜなら、福島にいる人は「福島にいる人」であり、かたや私は「福岡にいた人」であって、それ以上でもそれ以下でもないから。しかし、報道機関はそこに「日本の領土」という共通の括りを設定して、同一「国民」という概念を使用する。そのようにして「日本人」というイメージは喚起され（つづけ）るのである。私はこの時、ナショナリティ（ネーション）というものの威力というか、効果の程をリアルに肌に感じた。そのように強く意識した出来事はそれが初めてであった。
通常、私たちは、自分の身近でない範囲の人々のことを考えていない。現に私は、福島に居住をおいている人々のことなんて、微塵も想定していなかった。東北地方に旅行したいな、とか、仙台にグルメツアーに行きたいな、とかそれくらいの関心が在っただけである。
あの日の夜、全ての報道機関が危機を同時に伝えていたとき、私の意識は「日本人」の概念が有する適用領域からほんの少しだけ離れていた。私にはむしろ、福岡で生活する人々がいて、東京で生活する人々がいて、そして岩手や福島で生活をする人々がいて、という風に地理的に捉える方が正確なのではないか、と思えた。しかし、「日本人」という抽象的な概念は、その固有の地理性を忘却させ、巨大な物語（歴史）と共にそれらの人々を一挙にまとめあげる。
例えば、あなたがこの文章読んでいるとき、何処でもいい、例えば北海道の釧路でラーメンをすすっている人に、「あなたと私は一緒だよ！」、と呼びかけるその根拠は何であろうか？　或いは、オランダのハーグでフットボールを嗜んでいる人に、「あなたと私は同じ（人間だよ）！」と伝えるその根拠は？　そして、考えたら意外に深いこの謎を、例えばナショナリティという概念は隠ぺいしてしまう。そのようなことを私は学んだ。

ミクロにもマクロにも働くナショナリズムの身近な体験を話したところで、先程触れた歴史の体験というテーマについても最後に話しておきたい。私の歴史体験である。
ある時を境に私の歴史に対する意識は変わった。小学生の私にとって、歴史というものは単に参考書に書かれてある知識の総称だった。塾のテキストに書かれてある「千歯こきの効果は実に飛躍的だった」というのはイメージこそすれど、覚えてしまえばそれでおしまいという類のものだった。日本の歴史上の事件はどこかおとぎ話めいたものとして当時の私は捉えていたのである。

中学一年だったか二年だったか、学校の帰り道で、私は自転車を漕いでいた。横断歩道を渡って曲がる所で信号待ちになり、そこであることに気が付いた。そこにずっと建っていたはずの古風な民家が跡形もなく消え、更地になっていたのである。

ただそれだけのことであったのだが、その時の私には不思議な感覚だった。その帰り道はずっと昔から使っていたもので、その民家も幼少のころからずっと存在していた。それが突然消えたのである。そうして、土だけの地になった場所を見たとき、この土地は、様々な過去を抱えているのだ、という風に気付いた。

最近まで建っていた民家の土地という過去だけではない。江戸時代に、民衆の住む地としてここには粗末な宿が建っていたのかもしれないし、もっともっと遡って、たとえば源平合戦のとき、源氏に追いやられた平家の兵士たちが岡山まで後退してこの土地で血を流しながら死んでいったのかもしれない。そういう可能性に気づいたとき、私の意識は百八十度変わった。この土地だけでない。現在は、パソコン教室の入ったビルやアスファルトで塗られた郵便局の駐車場しか見えなくても、過去には各々の時点で全く違った風景を成していたのだ、ということに気付いた。様々な過去があった上で現在の形がある、それが歴史なのかもしれない！　源平合戦の妄想が当時の私にはピタリときた。この土地でもしかしたら歴史上重要な人物同士が剣と槍で戦っていたのかもしれない、そんな土地を僕は目の前にしているのだ……。

歴史は地層である。様々な過去を保持しながら、現在は一つの表面という形をのぞかせている。しかしその奥の堆積の構成が、「日本の物語」として語り直され、ときに大きな役目を果たしたりすることに気づくまでにはもう少し年月を必要とした。ともかく、教科書上の知識でしかなかった私の歴史認識は、ある時を境目にして、空間に時間（歴史）という次元が絡んでいるという発見で様変わりした。とても個人的な体験だが、物事を考えていく上でこの思い出に何回も立ち返っている。

（了）